

## 人格

人類の願求

人格を尊重せよ。

人格尊重の社会を作れ。

それは人類が長い間願いつづけて来た願求の一つであった。

釈尊の人格観

三千年の前、印度には四姓の別があつた。

婆羅門種……………宗教・典礼等を司る

刹帝利種……………王族、武力によつて政治を司る

毘舍種……………平民、農・工・商

首陀羅種……………奴隸階級

この四つの階級の間には厳密なる差別があつて、婆羅門族は、神聖なる家柄として絶対の権力を振つて、それ以下の種族を圧迫し、毘舍種・首陀羅種などは全く頭が上らず、人格が認められなかつた。

そうした危険なる社会状態の唯中に生れ出でたる者こそ、わが釈尊であつた。

釈尊は彼の教団の中に、この人間の因襲が作った方便のすがたを入れることをゆるさなかつた。

人類平等！ それは釈尊によつて掲げられたる旗印の一つであつた。如来の前には一切衆生の価値は平等である。この心境のわからない者には仏教の真髓はわからない。

しかし釈尊は人類平等の水平線に一切を引下しただけではなかつた。人類平等の水平線上に、人格尊重の真精神を生かされたのであつた。

釈尊の前には名門をほこる婆羅門なるが故に尊いではなかつた。彼のうちに尊い仏性のひらめきがない以上、決して釈尊の前には偉大なる存在ではなかつた。けれども奴隸の如く社会の下層に埋れたる首陀羅といえども、釈尊の前には棄てることの出来ぬ愛児であり、神性の輝く限り合掌に価する尊い菩薩であつた。

明治維新

昔いづれの国にも対建の時代があつて士族が天下の実権を握つていた。

支配階級たる武士の前には、農工商は土くれの如く取り扱われて、武士の横暴は許された。百姓町民は斬り捨て御免とて、ちよつとした過失があつても、時には取るに足らぬ私憤の前にも、その首は大根か何かのように斬り捨てられた。

そうした時代には人格者になるとは支配権を握ることであり、支配権の別名であつた。

そうした無茶が不合理が何時も許されるはずがない。

大地の相は永久に、あり得べからざる状態から、あらねばならぬ状態にと移ってゆく。

永続きすべからざる状態から、正しい状態にと移されてゆくべきである。

明治維新、それは実に万民が人間平等の自由の世界に解放されたのであった。徳川三百年、封建の時代は、明治の聖代にと移って来た。武士の腰から大小は取り去られて行つた。四民平等の時代が来たのであった。そうして大正を経て昭和の時代になつて来た。

人格尊重の人類の理想はどうなつたか。

我らの人格を尊重せよ！ そうした声が、今猶学校の内部からおこる。田園の中から叫ばれ、工場の中から獅子吼される。それは一体、危険であるのか、正しいことであるのか。

わかりきつた問題である。

人格とは支配権の別名であるのか。学歴と富と、生活の高さと、衣服と、門閥につけられた名前であるのか。

我らはそうした一切の誤りから出なければならぬ。

危険とは

一寸お役所をのぞいて見る。

「給仕！ 給仕！」

針のようにとがった、氷のように冷たい言葉が聞える。何故に「△△君」と呼んで2は悪いのであろうか。

一つの工場をながめる。工場主は主人で、職工たちは従者、そうした風習の去らない工場がある。それは古い時代の誤の一つにすぎない。

人格的傭人という言葉が職工たちの間からもれて来るのも無理はない。

工場主も人格であれば、職工も人格である。重役も神士であれば職工も神士である。人格は平等に尊い。

人格の尊厳を保ちたいと叫ぶ職工よりも、従者の如く考える工場主の頭こそ危険である。

校長が部下の職員の人格を尊重しない学校がある。部下を威厳で外部から圧制しなければ、部下は治まらないと思う頭の持ち主がある。その頭こそ改造さるべき危険物である。

名利か人格か

我らは長い間「名利」を唯一の目的と考えさせる功利的教育を受けて来た。大臣になれ、大将になれ、世間に知られる人になれ、富者か然らずんば位か、立志伝中の人になれ、英雄崇拜、鶴見祐輔氏の「英雄待望論」の中に出て来るような英雄、ナポレオン・シーザー・豊太閤、そうしたいわゆる英雄たれという教育である。

我ら凡人の心境はかゝる英雄になるとは心の名利心に棹させということである。名利の心をあふることである。見よ、過去の教育が、優等児と劣等児とを仕別けて、優等児は讚美され、掌与されて、得々として学び得るに對して、成続不良の子供とその親とが如何に、不快と羞恥の中にすくんでないければならなかつたか。優等生だけが何故尊敬されるのか、劣等児が何故悪いのか。学校での一番が社会に出ての一番であるのか。

一人の男が人生の使命のために貧苦と戦い、迫害と闘い、血みどろの歩みを続けているとする。その周囲をとりかこむ親や兄弟や妻などが、今はこのように困っているが、何時かはきつと社会的に大成して名をなすことが出来ると信じてついてゆく。そうした心地は無理もないが、本人にとつては悲哀である。

先日無産党の一党士は語っていた。

『親や妻が、『あなたはそうして悲惨な身の上でじつと忍んでやつてをれば、何時かは代議士位にはなれるか。』という』

親も妻もこの意味においてのみ、この境遇をながめる。それは悲しいことである。あるいは一生そうした意味では浮ばれないかも知れないのだ。

過去の社会では人格とは実に成功者の別名であつた。人格者とは決してそうしたいわゆる成功者を意味しない。人間性の本質に立脚して、相互尊重の心に立たねばならない。

法華經の常不輕菩薩は、一切人を拝んだ。誰をも、どんな人をも拝んだ。この一切人を拝む心がやがてそのまま常不輕菩薩を生み出したのであつた。善人だけを拝むのではない。悪人の上にも、尊いあるものがひそむ。地位を拝むのではない。名誉を拝むのではない。権力者を拝むでもない。実に一切群生を拝むのである。

甚だ失礼かも知れないが、職工を懐柔するための御用講演に出席することであるならば、私は御免を蒙つて帰つて来る。真理は決して、支配する者に利用されるべきものではない。重役・その他の幹部こそまず聞くべきである。全てがごぞつて参加すべきである。

上位に立つもの、まず拝む心になれ、下位に立つものも拝む心になれ。人格の尊嚴に変わりはありません。社長の人格も尊嚴であれば、一女工の人格も亦絶対である。

私がお前たちを働かし、養つてやるのだと、上から下へと恩きせがましくする考え方があつた。使われる方で、私がおつてやればこそ、という考えがある。この恩きせがましい考え方がどちらの世界にあつても傷つかないではおられない。

下女の給料は、決して高い所から低い所へ渡されるべきものではない。低い所から高い所へ捧げらるべきものである。又受け取る者も低い所から高い所へ取るべきではなくて、高い所から低い所へ受け取るべきである。相共に合掌されてある世界にこそ、道は輝いている。

資本家は職工を拝み、物質を捧げ、流汗労働に對して合掌せよ。職工は自らも尊嚴なる人格にさめて他の一切に合掌せよ。

それが労資協調になるなどと、功利的な考えではない。それが即ち道だというのである。少くともその世界には、人間を機械と見たり、奴隷的道德の強いつけはあり得ない。

富豪が貧しい人たちを呼び捨てにしたり、上級が下級を下僕のように考えたりすることは間違っていた。弟が兄を尊敬することだけが道ではない。兄は弟を尊敬すべきである。生徒が先生を尊敬すべきであることはもちろんであるが、先生こそ生徒を尊敬すべきである。

「無智なる大衆」という言葉を聞く。民衆は果して無智であるか。民衆が決して無智であるのではない。指導者が民衆を無智なりと見てなされる指導、それは決して民衆を真に生かしはしない。アメリカに於ける黒人奴隷の解放は、尊い人類の歴史であった。黒人の上に人格を認め、尊敬を認める心そのものが、白人の人格の解放であった。

拝む心になった時、児童の中にこそ教師以上の尊い魂の動きが見えて来るであろう。

人格尊重の声は正しい。人生最後の帰結が人格平等の自覚におかれた時、大地はもつと明るい世界になるであろう。

人間にかえれ

妹たちに送る

妹の手紙

「お兄様

御元気で御活動でございます由嬉しう存じます。

市中を飛びまわる……私の魂を一貫して流れる強いあるもの、それはお兄様を生かしたいという念願、それをおいては何もないのでございます。

それはお兄様を知るが故に、そしてどんな大きな責任が、いいえ、お兄様の念願がどんなに大きなものであるかを知るが故にです。

出来るだけはしたい。それはどんなに第三者に批判されるかも存じませんけど。

私は強く信じます。お兄様を生かすことは、真実に向かつて歩もうとする人々の強い光であり、力であることを。これは又私一人の願いではなくて、本部の皆の心だと存じます。

でないことに、これだけの大仕事が……そしてこんなに忙しいのに、黙って明るく働くその動きは涙ぐみたい様でございます。

お兄様！ お兄様はこの心だけでもきつとく満足して下さることだと信じます。ましてこの運動が着々と進みゆくことは私のお兄様をしてどんなに喜ばせることでしょうか。私はそれを思うと明るく強くなります。……………」

5

山陰の天地は寒くて陰鬱である。今日も朝から霰が降っている。私は今、鳥取県の中部の重要地、倉吉町の妙寂寺の奥座敷にこの便を書いている。この寺の御院家は、八雲龍震師、その夫人は本願寺の光照上人をお育てになった、近代きつての学者でもあり、信仰・人格共に一代の尊敬を集めた島地大等和上の令妹である。

波多野節子の強い念願は、この地の人々を動かし、殊にこの寺のお二人をよろこばして、この講演会が生れたのである。

東京十日間の講演がすんで、神戸の市電・岡山市をすまして、ここに来て私は、美津子さんとかずちゃんのお便りを受け取った。

涙なくして読むことは出来ない。

幹部会議・中枢会議、そして東奔西走、懸命の大努力が、私の留守の本部ではらわれている。今度の事業部の進出の報告を受け取りつつ感謝せずにはいられない。

同じ使命

兄が何を考えているのか。兄は如何に生き、如何に生きようとしているのか。

光明団精神は何であるのか。それをつかみ、それを生かそう。

それが、私の可愛くてたまらぬ妹たちの願いであり、生活の実践の態度であった。

私は幸福を感じる。そして暗涙にむせぶ。

同一生命に生きるために一心一体となつて、命がけになつて働く所に、団の礎は固められてゆく。

ここにも

私は鳥取に来てここに多くの友を与えられた。

住職八雲師の風貌が亡き父に似ており、その若々しい精神と、時代を見ぬいてゆく心の眼と、世相に対する公憤と勇氣、私はここに心に全く共鳴する先輩を発見したのだ。

三日間、こゝで全く心からの友を与えられた。

そうして鳥取の天地に光明団の支部設立の意気が誰からとなく燃えあがつて来た。こゝにも我らの世界が開かれる。

二十三日、倉吉町をたつ。

数名の新しい同朋たちは、上井駅で山陰本線に乗り替えて、由良駅までも見送つて下さる。

「念願は人格を決定す。」

新しく結成した二十名の同朋の一心から何が生れるのか。

伯者の大山は雪に曇る。船一雙見えない日本海は、大荒れに荒れている。

私はじつと考える。

汽車が米子についた。八雲龍震師とこゝで別れた。親に別れるような寂しき。

伯備線に移る。この汽車は四時岡山につく。私の帰りを鶴首して待っていて下さる人々のみ心を思う。

送る者の淋しい心、迎える者の嬉しい心。

私の留守を悪戦苦闘する妹たちのこと、本部員のことを考える。

6

卑下と高慢

我らはともすれば我のいなければならぬ世界から、さまよい出でて高上がりする。高慢の世界に何があるう。まことに高慢になった時、我を見失い、多くの人を見失う。

高慢なる時、心のうちは空虚である。空虚、何という嫌な文字であろう。

一念この空虚を感じる時、たちまち我らをおそうものは、卑下である。卑下する心は暗い心である。自分自身を侮辱する心である。自分自身を侮辱する程の罪惡がどこにあるう。

これ即ち、積尊が、弊(卑下)と驕慢と懈怠の三つの心は、浄土に通ぜざるものとして嫌った所以であろう。

まことに自らを卑下する者は、そのま驕慢なのである。卑下と高慢は、悪き生活の両面である。我らは驕慢から出なくてはならない。我らは卑下から救われなくてはならない。そこに「尊重」の生活がある。

誤り

岡山市でなつかしい同朋たちと語つた私は、福山市に帰つた。私を一番に待っていてくれたのは誰であつたか。それは実に、階級戦線の上に悪戦苦闘する労働組合の幹

部の人たちであった。彼らの大部分は「宗教は阿片である」と信じてもあり、宗教家を敵ともしておったのだ。

しかし宗教自体が、大乘仏教の真精神が、民衆に対して、阿片であったのか、毒であったのか。そして又、社会から危険視され、厄介者扱いにされるこの方々が、はたして人間以上の危険人物であるだろうか。

私は完全にそれらの人たちと一脈の生命の血の流れを見出したのだ。

誰だつて一つになれるのだ。血の通う人間によつて結ばれた時、主義は人間ではない。立場は人間ではない。マルキシズムも飽くほど聞かされた。アナーキズムの検討も毎日のようにした。しかしそれははたして人間をほんとうに解放することの全てであったか。彼らの中の賢き人たちは言った。

「現代ほど科学的迷信で満された時代はない。」と。

## 尊重

私は私の世界に人間以外の立場を持ちこむことを許さない。

今朝から、本部に帰ることを急ぎつつも、ついに明日にすることを除儀なくされるほど、なつかしい人たちと語った。

老婆も来た。青年も来た。アナキストもマルキシストも、学校の先生も、奥様も、次から／＼の人が集つては語つてゆく。来る時には立場を持つて来ても、帰る時には立場を捨てて、人間となつて帰つてゆく。それが私たちの世界である。

釈尊の世界に、世の中に生きてゆく方便の仮の相を、持ちこむことをゆるさなかつたように、我らの世界もそれではならないのだ。

人間にかえるとは人間本然のすがたにかえることだ。そこに尊重の生活がある。自らの生活を尊重し、自らの人格の王座を尊重する者にして、はじめて一切人の人格を尊重するのだ。

人類の解放の究極は、人類の人格的解放である。人格の尊厳が保持されない世界に、どこに人類の真の平和があり解放があるうぞ。

所詮、我らの解放は、それがいかなる理由と方向とにおこされようと、道義的解放がその根底でなくてはならない。

福山労働組合がその根本精神を「道義的進出」と改められた所以もこれである。

光明団！ 我らの世界では決して、地位権勢が尊ばれてはならない。貧しさや無学や老いたるが故に侮辱されてはならない。いいえ一切のそれがどんな暗い過去を持ち、腐爛した人たちであろうと辱めてはならない。

いかなる人と雖も、一念「信」に蘇る時、尊き道義人だからである。

「無智なる大衆」そうした言葉が果して、本質的に使い得るであろうか。釈尊は彼が正覚のみ座に立ち上つた時、何と叫んだか。

「奇しき哉、一切衆生悉く仏性あり。」

それは釈尊が一切衆生の底に合掌して見出されたる、一切衆生尊重の声ではなかつたか。

合掌とは、人生の暗黒面に目かくしして、甘ったるい空気の中に酔うた、感傷的な世界ではなくて、我らの真の道義に生きる生活態度である。我が家に帰りゆく相である。高慢を出でて、一切群生の下座に立つたる相である。

親鸞は、真理と人との間に何物の偶像をも存在することをゆるさなかつた。おん同朋・おん同行とは一切人が大地の上にかえつて、真理の前に合掌した世界であつた。絶対平等に大地の上に解放された世界である。完全に人間に復帰した世界である。

我らが正しい世界に帰つた時、そこには実に、同朋たるべき一切衆生と共なる世界を発見する。来る人も来る人もみんな兄弟である。去る人逃げる人も兄弟である。大地の上に立つ、そこには同朋以外の何ものもない。そこに我らは如何に生くべきかを知らされる。

## 教育

教ふる者は壇上に立ち、教えられる者は壇下に並ぶ。

しかしながら教える者が、義務的に、自らもあやしむような自信のない教訓を砂をかむように話して行くこと、そうして教えられることに何等の感激も親しみもなくもじつと坐つて黙つている、そうした教育は決して真の教育ではない。

「親鸞は弟子一人も持たず」それが師としての親鸞の教育論の根本であつた。

「たとひ法然上人にすかさされまいらせて念仏して地獄におちたりともさらに後悔すべからず……」

それが弟子としての親鸞の生活であつた。

吉田松蔭は死を賭して、心をこめた教育をした。

魂の流れ……一切人類が平等に掬める生命の流れ、その流れに我と人を見出す時、我らは一に結ばれた幸福を感じ、共に伸びてゆく真の教育を受ける。

私は語つて歩く、しかしそのままが求道の放である。

五人坐る。一人去る。二人来る。そうして来た者も来た者も皆、一つ流れにあることを実感する。音楽について語つた人もあれば、胸中の煩悶をなげ出す人もある。語る人も、聞く者も共に育てられてゆく、これが真の教育ではあるまいか。私は今日一日こうした輝きの中に暮した。

## 人間へ

なつかしきあまり、長いたよりを書いた。この夏以来、女子青年会設立のために、今度の事業部進出のために働いてくれる本部員、皆のことを心から感謝する。団の礎は皆の我を捨てきつた、献身的努力の中にすえられる。

又一人文一人、人間にかえること、そこには一つになりきつて歩む力強い世界が開かれる。立場をすてて人間へ、大地へ。我らの世界はそこにある。